慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「ヴ・ナロツド」と其後の革命的社会運動：露西亜社会運動史の一齣
Sub Title	
Author	伊藤, 秀一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.10 (1925. 10) ,p.1467(87)- 1508(128)
JaLC DOI	10.14991/001.19251001-0087
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19251001-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「ヴ・ナロッド」と其後の革命的社會運動

——露西亞社會運動史の一齣——

伊藤秀一

一

前世紀七拾年代の露西亞史を繙く者は其時代を風靡したる革命的知識階級の一の特殊なる社會運動を看過しないであらう。多感にして熱情的なる露西亞の青年は富裕なる家庭、貴族的なる父祖の家を棄て、自らの快樂を否定し、堪え難き迫害と苦慘とを甘受しつゝ、或は牧師として、或は教師として、或は又一介の勞働者として、滔々相率ひて民衆の中へ革命的自由思想の宣傳に赴いたのである。彼等は主觀主義學派の創設者 Lavrov の學徒であり、眞理と正義の闘士 Mihailovskii の遵奉者であり、又かの無政府主義革命家 Bakunin の後繼者であつた。而も彼等は其の捧持する主義思想の如何に拘らず、民衆の解放といふ確固たる一の共同目的の下に團結し活動した。而して又如何なる手段方法を以て其の目的を達成す可きかの問題に關しては必ずしも一致する事がなかつたとしても、民衆の間に赴き、之と接近し且つ融合するの絶對的に必要なるを確信して止まなかつたのである。「民衆の中へ！」（"V'Narod, V'Narod, idti v Narod!"）の標語は彼等によつて高く叫ばれた。併し自由と正義とを求むる熱情の奔迸する所に、再び苛烈なる專制主義の暴力的迫害と斷罪とが壓倒する。

鬪爭は鬪爭に次ぎテロリズムと流血の慘とが之に伴なふた。斯くて爾後殆ど拾箇年に亘れる鬪爭の悲劇は、薄幸なる皇帝（ツアール）歷山二世の暗殺によつて其の幕を閉ぢるのである。

露西亞の社會運動は、一八八一年に於ける歷山二世の暗殺を轉機として茲に新時代を劃したものと見る事が出來る。即ち農奴解放後の社會運動の指導者たるナロードニキに代つて、社會民主々義の運動が漸く此の國に勃興し來つたのである。マルクシストの口吻を藉りて言へば、露西亞の社會主義は空想より科學への發展を成就するに至るのである。以下叙說する所は、「民衆の中へ」の運動以後此の時期に至る間の露西亞社會運動の概要である。

II

「ヴ・ナロッド」即ち「民衆の中へ」の運動は、一八七三年より翌年に亘つて最高頂に達した。此の運動の母體と看做されるものはチヤイコヴスキイ團（註一）である。

（註一）　チヤイコヴスキイ團（Čaikovcy）は、其の創設者 N. Čaikovskii の名に因んで斯く呼ばれた。併し Čaikovskii は既に早く（一八七一年）官憲の忌諱に觸れて亡命し、一九〇五年迄海外に居住して居た。近年彼は農民運動及び協同組合運動の指導者として露西亞の政治的、社會的生活の上に重大なる貢獻を爲して居る。

チヤイコヴスキイ團は、最初（一八六九年の春）セント・ペテルスブルグに於て、かの Nečaev の恐怖主義的詐謀陰謀の主張に反對して組織された極く小さな集合であつた。其の目的とする所は自己改善と自己敎育とであつて、總ゆる組織は其れが今後如何なる政治的性質を持つに至るとも、又將來に於ける一般狀態の經過に伴なつて如何なる綱領を採用するに至るとしても、其の基礎として、道德的に發達せる個性を有しなければならぬといふ事を團體の主旨とした。其の目的に遵つて撰擇せられたる書籍が、廣く會員の間に頒布され閱讀せられた。（註二）

（註二）　試みに此の團體に依つて撰擇せられたる書物を擧ぐれば、先づ Černyševskii, Dobroljubov, Pisarev 及び詩人 Nekrasov の著作、Darwin, Spencer, Mohl, Draper の著書。又幾多の史書の間に Louis Blanc の「佛蘭西大革命史」第一卷が擧げられて居る。又 Lassalle の諸著及び Marx の「資本論」第一卷（第二卷以後は當時未だ公刊せられず）等。又此の團體は端西に印刷所を設けて主として國禁の書を印刷した。Dobroljubov の著作、Lavrov の「歷史的書翰」、其他 Lange, Blanc, Couries, Flerowski 等の佛蘭西革命及び勞働問題に關する書が其の主たるものである。右の列擧中に無政府主義的著作の缺けて居る事が不審に思はれるかも知れない。併し無政府主義思想は、當時主として外國から、即ち Bakunin の個々の小册子並に其の機關雜誌「人民の問題」（"Narodnoe Dělo"）によつて彼等の間に普及し、又時々本國に潛入せる Bakunin 一派のものによつて宣傳せられた。Bakunin の主著が初めて露西亞語で刊行されたのは一八七三年であると言はれる。（Kulczycki, Geschichte der russischen Revolution. Bd. II. SS. 72-73.）

チヤイコヴスキイ團の此運動は、單にセント・ペテルスブルグにのみ止まらずして、全國各都市に同種の小團體を有するに至つた。而して時勢の進展に伴ひ、且つ西歐諸國に於ける社會運動の進歩發達に刺戟されて、そは知識階級間に於ける社會主義思想傳導の中心となり、又自ら地方各團體間の仲介者となつたのである。斯くて、民衆の革命主義的敎養を增進せしむるを以て最も緊切なる革命の豫備的條件なりと信じ、從つて專ら活動の主力を直接農民及び都市勞働者其ものゝ間に傾注すべしとの思想傾向が、チヤイコヴスキイ團を中心として各地方に幾百となく組織されたる總ゆる團體に普及して行つた。而して其の結果として現出したのが「民衆の中へ」の運動であつた。

或る論者は、「民衆の中へ」の運動の原因を、國際勞働運動（インタアナショナル）の思想の影響

に歸せしめて居る。凡そ勞働者階級は自ら彼等自身の政治的社會的使命を遂行す可き任務を負ふものであるとの觀念は、當初より國際勞働運動の根本思想を形成するものであつて、此の思想が露西亞の革命的知識階級に理解さるゝに及んで、彼等は徒らに談論文筆の裡に跼蹐するを屑しとせず、進んで勞働者階級の間に身を投ずるに至つたとなすのである。

勿論此の運動も亦、國際勞働運動が全歐羅巴に生せしめた一般的感情の結果であり、且つ其れが露西亞青年の精神に最も顯著なる反響を齎したものなる事は、疑ひを容れぬ所であらう。併し乍ら「民衆の中へ」の運動は、之よりも遙かに著るしき特長を持つて居る。何故かと言ふに、そは露西亞獨特の社會的情勢、就中、農奴解放の結果として生じたる一般社會的感情の當然の歸結であつたからである。農奴解放は、形式上では、成る程法律上の人格の自由を農民に保證した。併し農民が其の新に獲得したる機會を利用し得るためには、當然若干の組織的變革が必要であつたのである。然るに專ら地主の利益を擁護するを主眼とする政府の政策に禍ひせられて、遂に此の種の改革が爲されなかつたので、從つて其の解放は最も不完全なるものであつた。農民に對する物質上、精神上の切斷し難き繫縛が依然として殘存し、而も彼等の無知と貧困とを一掃す可き期望は殆ど存在しなかつた。されば農奴解放に依つて保證されたる自由は、畢竟、何等社會的價値なき一片の法律上の條文に過ぎなかつたのである。然らば如何にして此等一切の事情を變革す可きである乎。此の問題は、頭上の一擊の如く露西亞の知識階級青年の心を搏ち、樣々の感動を惹起せしめた。彼等は此の緊急の問題を解決するために進んで其の學問を提供す可きであらう乎。彼等は正に斯く爲すを得たであらう。併し學問は結局、何等明確なる解決をも與へるものではなかつた。討論は幾度び繰返さるゝとも、明々白々なる現實の事實、即ち同胞の多數が其の肉體も精神も共に殆ど支持し得ない程の窮乏に惱んで居る目前の事實は些かも改善せられ得なかつた。彼等は遂に學問の徒勞を感じたるのみならず、安閑として學問に沒頭して居るのは、明に最も嫌忌す可き利己主義であると考へたのである。斯くて先づ自ら民衆の中へ赴き直接彼等と其の行動を共にするを以て最善なりと信じ、最早やこれが方法の考究に時を空費す可きではないと思念するに到つたのである。（Mavor, An Economic History of Russia. vol. II. pp. 103-104 參照）。

III

自らチャイコヴスキイ團の一員として「民衆の中へ」の運動を鼓舞し指導せる Petr Kropotkin は、之を次の如く說明して居る。若し露西亞の青年が、社會主義を單に抽象的にのみ考へて居たとすれば、「生產用具の共有」といふ樣な社會主義的原則の宣言位で滿足を感じて居たかも知れない。そして彼等は或種の政治運動に向つたかも知れない。諸國に於ける中流階級社會主義政治家等は實際此の方向を採つて居る。併し露西亞の青年は全く違つた方法で社會主義に導かれて行つた。彼等は社會主義の理論家ではなかつた。彼等は勞働者が生活して居るよりもより良く生活しないといふ事に依つて、其の團體內では「自己の物と汝の物」とを區別しない事に依つて、更に彼等が父より相續したる富を彼等自身の滿足の爲めに享樂するを拒む事に依つて、社會主義者となつた。彼等はトルストイが戰爭に關して人々に爲した勸告、即ち武裝し乍ら戰爭を批判するといふ樣な欺瞞を止め

て先づ武器を執る事を拒否せよと要求した事を、資本主義に對して行つたのである。露西亞の青年は、其の父の所得を個人的欲望のために利用する事を峻拒した。而して其のために彼等は進んで民衆となる事が無論必要であつた。其れ故幾千の青年男女は既に彼等の父祖の家を棄て、今や自らの職業に依つて生活する事になつたのである。「之れは組織的の運動ではなかつた。人間の良心が急に目醒めた或る時代に起る、かの民衆運動の一つであつた　而も今や小團體が組織せられ、露西亞に自由と叛逆の思想を廣める系統的運動を試みんとするならば、必然的に、農民及び都市勞働者の群の間に其の宣傳を行はねばならなかつたのである」と。

Kropotkin は又次の如く述べて居る。「多くの著者は、此の『民衆　中へ』の運動を外國からの影響といふ事で說明しようとした。『外國煽動家は至る所に居る』とは好んで用ひられる說明である。勿論我々青年が Bakunin の力強い主張に傾聽したのは事實である。又國際勞働運動の活動は確かに我々に絶大なる影響を與へた。併し『民衆の中へ』の運動は遙かにより深い根蒂を持つものである。外國煽動家が露西亞青年に訴へた以前に、國際勞働運動が組織されない以前に、此の運動は始められて居た。……私も亦チャイコヴスキイ團内部の此の運動を增進せしむる爲に全力を盡したのであるが、併し私は唯、如何なる個人的努力よりも遙かに無限に有力な潮流に從つて働いたに過ぎなかつたのである」。（Memoirs. pp. 307-308）。

Kropotkin の此の說明は多少の粉飾があるとしても、最も良く此の運動の本質を傳へて居るものゝ如くである。既に早く Herzen は「民衆の中へ」の警語を發して居る。又虛無主義の哲學者 Pisarev の如きも肉體的勞働の必要を指示して、之れこそ民衆へ純粹に接近するの手段であると說いて居る。（Masaryk, The Spirit of Russia. vol. II. p. 305）。而して Karakozov の徒黨は、明に此の運動の先鞭をつけたるものであつた。（Kulczycki, a. a. O. S. 71）　Lavrov, Bakunin 等も亦明に、此の運動の精神を以て、前時代即ち六拾年代に於ける Černyševskii, Dobroljubov の革命思想の繼續である事を承認して居る。（Max Nettlau ; Bakunin und die rus ischer revolutionäre Bewegung in den Jahren 1868-1873. Grünberg : Archiev. V Jahrg. S. 361 參照）。

併し我々は、當に革命主義宣傳の共同目的によつて結合せるのみならず、更に個性の尊重といふ倫理的目的の下に集合團結したる此等の運動に於て、Lavrov, Mihailovskii 及び Bakunin の思想の直接の影響を最も明に看取し得るのである。就中 Bakunin が其の雄健闊達なる文筆を鼓して「民衆と近く接して、民衆と融合する英雄的行動」を讃稱し、「民衆の中へ」の主張を高唱せるの事情は、筆者が嘗ての機會に記述せる所である。（本誌二月號拙稿「七拾年代の露西亞社會思想概觀」參照）。農奴解放に續いた特殊の社會的思潮を看取したる社會運動の指導者等は、又擧つて此の主張に呼應したのである。

四

「民衆の中へ」の運動は、直接の結果から見れば、明かなる失敗に終つて居る。其の主要なる原因は、民衆の中へ赴いた革命的知識階級の多くのものが文學並に歷史上の偏見に囚れて、農民の眞相を充分に理解して居らなかつたといふ點にある。嘗て筆者の再三指摘したる如く、西歐諸國に於け

る社會的、經濟的生活形式に嫌焉たらず、而も自國に於ける村落共産團體の制度を理想化して、露西亞は其の制度を基礎として直ちにより高き社會生活の形式を實現し得可しといふのが、所謂當時の社會主義思想の根柢をなすナロドニキの觀念であつたのであるが、斯の如き觀念の中には、自ら露西亞の農民（muzik）を尊重し之を理想化すゝ傳統的のスラヴ主義的思想が流れて居たのである。勿論「民衆の中へ」の運動の當時にありては、既に都市勞働者の存在を無視し得ない狀態にあつたので、當然彼等の間にも運動が行はれたのであるが、革命的宣傳の主力は依然農民の間に傾注された。彼等革命家にとりては、其の理想化されたる農民は直ちに彼等の高遠なる思想を理解し、革命的大衆運動に向つて彼等と一致し團結するかの如く信ぜられたのである。

然るに農民は、至る所に於て彼等の期望を裏切つた。農民は知識階級の運動の眞意を捕捉し得ずして、常に保守的觀念と退嬰的態度とを以て彼等との接觸を回避したのである。Mavor は之を次の如く記して居る。「初め『民衆の中へ』の運動が行はれた時、農民は土地問題の根本的解決を熱望して居るのであるから、從つて彼等の革命的手段に聽從するだらうといふ事が想像された。然るに間もなゝ斯ういふ事が明になつた。農民の待望して居るのは何等かの奇蹟の起るといふ事だけである。だから彼等農民にとつては、斯の如き奇蹟の出現を容易ならしむるための手段を講ずるといふ樣な考は、全然問題外てあつたのである」。（op. cit. p. 105）。故に自ら民衆の中に投じたる知識階級の人々は、彼等の眞摯なる努力にも拘らず、農民の無力と無關心とに依つて殆ど何等の進歩の行はれ難きを知り、痛くその意氣を沮喪せしめたるのみならず、農民は又官憲に左袒して彼等を裏切る場合が稀ではなかつたので、甚だ絶望せざるを得なかつたのである。加之、他方官憲は此の運動を抑壓するための高壓的手段を用ひ、大規模の捕縛に續いて峻烈なる斷罪と處刑とを執行し、全く之を絶滅せしむる迄決して逮捕の手を緩めなかつたのである。（註）（Sack: The Birth of the Russian Democracy. p. 47. Mavor; op. cit. p. 105）。

（註）Stepniak の記す所に依れば、捕縛され且つ審問に附せられたるもの、總數は千四百人で、其中七百人は間もなく釋放せられ、殘餘の者は一年乃至四年の禁錮に處せられた。「一九三八」（"the 193"）の審問に於て、其の中七十三名は、四個年に亘る審問の間に、或は發狂し或は自殺したといふ。而も結局有罪だつたのは四十名に過ぎなかつたのである。如何にその壓迫の苛酷であつたかを推知し得る譯である。

併し「民衆の中へ」の運動の失敗と官憲の之に對する峻酷なる刑罰とは、決して革命的社會運動を抑止するの原因とはならなかつた。一方に於て、此の運動は、其の結果として農奴解放以後に於ける農民問題の實際的性質を一層充分に理解せしめ、從つて革命的知識階級をよりよく糾合團結せしむることになり、他方に於て、官憲の極端なる壓迫は、此等革命的分子を壞滅し得なかつた許りではなく、反つて彼等を促して恐怖主義的行動に出でしむるの結果を釀成したるものであつた。

五

さて先にも述べたる如く「民衆の中へ」の運動が Bakunin の思想の影響を受くる事著るしかりしは、拒否せられ得ざる事實であるが、Bakunin 自身も亦一八七二年國際勞働者協會脫退の後、露西亞の社會運動に直接關與する事屢々であつたがため、彼の影響の下に組織せられたる無政府主義的の結社團體は、「民衆の中へ」の運動の終熄後に於ても、猶各地に亘つて彼等の運動を持續して居た。

此等の結社中著名なるものとして我々は Lermontow を中心とする團體、Sergius Kowalik に指導さるゝペテルスブルグの結社、並に Golouschew 團體を擧ぐる事が出來る。其等は主として Bakunin 思想の宣傳と革命的叛亂の煽動とに從事したのである。例へば一八七三年九月の宣言書「露西亞革命家に與ふ」の內容は、明に Bakunin の思想の表現であつた。宣言書に言ふ。我等の祖國は全世界の革命である。我等の唯一の敵は總ゆる種類の權力形態である。それが宗教上の敎義であらうと、科學上の理論であらうと、或は政治的、社會的又は經濟的制度であらうと、同じ事である。故に（一）、今日の市民社會を形成する所の一切の宗敎上、政治上、社會上の諸制度を徹廢し、（二）、自由なる民衆の獨立的任意組織を創設し、之れを以て現在の國家組織に代ふる事が絕對に必要であると。宣言書は民衆の革命的本能を信じ、革命とは革命主義的熱情の組織的爆發であり、同時に市民的國家組織の完全なる破壞を意味するものであると考へる。又それに依れば、無政府（Anarchy）とは人民の內に存する努力の表現に他ならぬ。人類に於ける眞の平等及び事物の新しき秩序、換言せば全人の圓滿無障の發展と勞働の任意組織を基礎とする新秩序とは、此の無政府から生じ來るものである。而して宣言書は、進んで Bakunin の所謂聯合主義を基調とする自由社會の組織を提唱して居るのである。（Kulczycki: a. a. O. SS. 121-125）。

Lavrov の學徒も亦、「民衆の中へ」の運動に左袒したるのみならず、社會の根本的變革を主張し且つ國家的權力を否定するその態度に於て、概ね Bakunin 派の主張に一致した。併し後者の著るしく革命的なるに比して、前者の主張は寧ろ漸進主義的の色彩を帶びて居た。彼等は人民の敎化を以て第一の緊要事なりとし、社會變革の到來する迄には尙、相當の準備期間が必要であると認めて居たのである。

Lavrov 派（Lavrovist）は、一八七三年より同七八年迄チューリッヒ及び倫敦で樣々の形式で刊行された機關雜誌 "Vpered"（前進）に據つて、その主義の宣傳に努めた。"Vpered" の綱領は、各批判的能力を有する人の參加す可き二個の普遍的職務即ち二個の鬪爭の存在を認めて居る。一は神學的及び形而上學的觀念に對する現實主義的觀念の鬪爭、宗敎に對する科學の鬪爭であつて、他は不勞消費に對する勞働の鬪爭、總ゆる形式の獨占に對して、個人の爲めに完全なる平等を得んとする鬪爭である。綱領に依れば、前者の鬪爭は殆ど露西亞に於て終了した。併し後者の鬪爭に關しては、今やそのための現實主義的基礎が必要である。而して玆に現實主義的基礎とは、實證論的、科學的社會主義を意味するものであつた。（Masaryk: The Spirit of Russia. Vol. II. pp. 89-90）。此の黨派は、Lavrov に遵つて Marx の階級鬪爭說を承認した。又經濟問題が總ゆる問題の根幹である事を理解し、政治問題は之れが從たる可きものである事を主張して居る。更に又彼等は、露西亞の農民を工業勞働者に對すると同じ見地から觀察して、此等全勞働者階級を網羅する包括的組織の必要を力說する。個々の鬪爭は曾に不合理なるのみならず、彼等の敵の强大なる組織に對して殆ど無力なる可きを以てゞある。彼等は、終局の目的は一擧にして達成せられ得ないものであつて、必ずそれに到る中間的階梯のある可きを信ずるが故に、常に目的の達成を可能ならしむる手段を追求し、又之れが適當なる手段を撰擇するに躊躇す可きではないと主張して居る。けれども彼等は、自由黨

の立憲主義には全然反對する。何故かといふに、彼等にとつては、單なる政治的改革は無意義なるのみならず、中央集權的帝政に代ふるに中央集權的市民政治を以てせんとする企圖や、又今日の國家權力の分配形式を排し、他のものが代つて之れが分配に參加せんとする一切の努力こそは、實に社會主義者が全然敵視す可き所のものであるといふにある。

綱領は各國民の關係に論及し、此等の問題は畢竟社會的鬪爭といふ全民の共同目的に依つて覆はる可きものである、換言せば、言語を異にし文化の程度を異にする所の諸國に於て、社會的發展の徑路は必ずしも一樣ではなくて、其等の國民は各々特殊の任務を有す可しとするも、而も全民は彼等の傳統を超えて人類共同の目的の爲めに一致團結す可きものであると言ふ。即ちそは、各國民相互間の敵視を以て最も非社會主義的なりとし、インタアナショナルの精神を力說する點に於て、Bakunin 斯くて、此の綱領が國家權力を排斥し又インタアナショナルの精神を高唱して居るのである。派の無政府主義的主張と些かも異なる所がない、兩者の顯著なる相違は、既に指摘せる如く、前者が先づ革命的變革の豫備條件として、人民を啓發敎化するの必要を信じたるの點に繫るものである。綱領の示す所に從へば、露西亞に於て人口の優勢なる多數を構成するものは農民であるから、露西亞社會主義者の特殊なる任務は此の方面に存して居る、而して露西亞の革命家即ち知識階級の仕事は、社會主義の目的を人民に理解せしむるにある。併し彼は人民の上に權力を行使しようと望んではならない。彼の唯一の任務は、一般の社會的熱情を實現する事に在る。個性として思考する所の信念を人民に保有せしめ、又人民を敎化して彼等自身の目的と活動とを實現せしむる、換言せば

より善き將來のために道を鋪くのが知識階級の任務である。「歷史的發展の經過が、革命の時期が適當し而して露西亞の人民が其のために準備されて居るといふ事を指示したる時にのみ、初めて我々は、大革命の實現を人民に慫慂するのが正當である」。革命は人爲的に喚起せられ得可きものではない。それは長き一聯の複雜なる歷史的行程の結果であつて、個人的意志の結果ではない。勿論適時に於ける叛亂の企圖は、假令不成功に終るとしても猶且つ社會的敎育の一便法である。併し特殊の革命が有用であると又は有害であるとに論なく、革命が歷史的發達の結果として生ずるといふ事は、不可避的必然の事實である」と。又此の綱領が、村落共產團體（Mir）を社會的經濟的基礎とし、此の上に全社會の社會主義的改革を實行す可しとするナロドニキ的觀念を固執して居るのは勿論であるが、唯之れが實行の前提條件として、農民が敎化され充分社會的欲望を理解するに至る事が必要であるとして居るのである。然らずんば、假令革命が成就するとも、彼等が再び少數者のための搾取の具に供せられるを保し難いからである、と。（Kulczycki. a. a. O. SS. 114-116. S. 120.）

Marx & Comte versus Bakunin：之れが此の革命的綱領の中心思想であつた。當時 Bakunin の革命主義に鼓舞せられた露西亞青年の戰鬪的熱情を目擊したる Lavrov は、「飛躍の前に凝視せよ」と諫言した。彼は秘密結社の陰謀に反對して宣傳の效果を強調した。故にその反對者は Lavrov 派を侮蔑して「改進論者」（Progressives）と呼んだのである。（Masaryk. op. cit. p. 92）

兎もあれ、Bakunin 派と Lavrov 派とは兩々對峙して彼等の主義の宣傳に努めた。此の二個の革命的社會思想の傾向は、七拾年代に於ける露西亞の知識階級を全く席卷し盡したるの觀がある。一

八七三年の秋 "Vpered" の第一號が露西亞内地に密かに頒され、之れが普及せられたる時を同じうして、Bakunin 派によつて編纂せられたる Bakunin の著作「國家と無政府」（"Gosudarstvennosti i Anarchija"）及び「インタアナショナル」の史的發展」（"Istoritscheskoe Razvitie Internacionale"）が之れ又露西亞に現はれ、其の翌年五六月の交 "Vpered" の第二號第三號の出現するに及んで、Bakunin 派は Guillaume の著書の反譯「プルードンの無政府主義」（"Anarchija po Prudonu"）を以て之に對したのである。（前揭描稿參照）。

六

露西亞に於ける社會主義的革命思想は、常に專制主義的帝政に對する反逆の思想と錯綜して居る點に於て、最も著るしき特色を有するものであつた　斯くて我々は社會的經濟的變革を標榜する革命的民衆運動の主張せられたる時代に於て、又常に、政治的テロリズムの傾向が之れに隨伴せるの事實を看過し得ないのである。一八七五年以降、ジュネーブの機關紙 "Nabat"（警鐘）に據れる Tkačev の Jacobinism は、正に之れが適例である。

Tkačev は、農奴解放直後に於ける革命的示威運動に參加したる Blanquist の一人であつて、夙に Karakozov 事件並に Nečaev の陰謀事件に連座して、具に監禁投獄の辛酸を嘗めたる革命家である。彼の目的とする所は、Nečaev の Jacobinism を繼承し、更に之を發展せしめんとするにあつた。彼に依れば、革命の第一の直接目的は政權の簒奪にある。彼にとつては、Lavrov は固より Bakunin すら、Nečaev の「革命教義問答」に於ける「プルジョア似而非革命主義者」に他ならなかつたのである。（註一）

Tkačev の思想は明に無政府主義的であつた。併し彼に依れば、無政府主義的社會は遙遠なる將來の理想と認む可きものに過ぎない。無政府は權力の否定を意味する。併し權力なるものは、無政府主義者の思念する如く現在の社會的害惡の基礎ではなくて、必然的に存在する現象に他ならぬ。即ち一切の社會的慘禍、一切の社會上の虚僞といふ樣なものは、權力の結果ではなくて、肉體上、知識上、經濟上、政治上、其他總ゆる方面に於ける人間の不平等の結果であつて、此の種の不平等が存在する限りに於て、其の社會は又當然權力の支配する社會である。故に社會全員の間に完全なる平等が行はれざる限り、無政府狀態の實現は不可能である。換言せば、將來の社會秩序の最も著るしき特長は、無政府ではなくて平等である。平等行はれて初めて無政府狀態が可能となり、茲に初めて完全なる自由が存在する。總て此の觀念は又唯一つのものに包含せられる。同胞愛（Brüderlichkeit）が即ち之である。同胞愛の支配する所に自由と平等とがあり、其處には何等の權力も存在しない。さて斯の如き見地から出發して、Tkačev は次の如く觀察するのである。平等と同胞愛とを招來する事なくんば、如何なる革命と雖も、無政府主義的社會組織を實現する事は不可能である。此の目的に向つて、先づ社會の諸條件が變革せられねばならない。不平等と猜疑と競爭とを支持する一切の制度が絶滅せられねばならない。そして此等のものと全然反對の諸要素を社會生活の中に

（註一）Karakozov 事件、Nečaev の思想と陰謀、並に後者と Bakunin との關係等に就ては、本誌第十八卷第九號所載拙稿「農奴解放後の露西亞社會運動」參照を乞ふ。

發達せしむるが如き制度が建設せられねばならない。而して此の革命的事業を遂行するものは革命的國家であるといふのが、彼の結論である。

Tkačev の革命的國家は二重の機能を有する。消極的の即ち破壞的の機能と、積極的の即ち建設的機能とが、之れである。前者は鬪爭であり暴力行爲である。然るに建設的行動としては、國民議會（Narodnaja Duma）と司法上の他の社會的代議制度とが必要であるとせられる。斯かる制度の下に於て、初めて實際上の意識的宣傳即ち新秩序の原則に適合する敎育が、可能となり有效となるのである。既に述べたる如く、Lavrov 派が、人民の社會主義的敎化を最も必要なりとし、革命の成就は斯の如き敎育の普及に依存すると主張せるに反して、Tkačev は、舊秩序の暴力的顚覆が革命的宣傳に先行す可きであると說き、革命黨が國家權力を簒奪せざる間は、叙上の宣傳は概ね不可能にして無效なりとの見解を保持せるものであつた。換言せば、革命的國家は其の權力を獲得し、且つ國民議會を支持する時に、初めて社會革命の實行に着手し得るのである。

彼の提案する社會的經濟的改革は次の如きものであつた。（一）、現在の村落共同體を漸次變革して、團體員が共同的に耕作し、生産の結果を共同的に享樂する所の、共産團體となすこと。（二）、土地の私有は次第に之を廢止し共同所有に移すこと。（三）、生産物の交易のために過多の仲介者を必要とするが如き制度を次第に廢止すること、同時に給付に報ゆるに給付を、目に報ゆるに目を、といふが如き資本主義的原則を廢して、同胞愛及び相互連帶の原則を以て之に代ふること。（四）、全人民の完全なる義務敎育の中に、愛と同胞愛と平等との精神を誘導することによつて、肉體上、精神上、並に道德上の不平等を漸次廢除すること。（五）、婦人の隷屬、子女の束縛、男子の專橫を基礎とする今日の家族制度を徐々に廢止すること。（六）、漸次共同體の自治を實施しゆくこと、其の結果として中央集權的國家權力は次第に弱められ、結局死滅するであらう。

無政府主義的狀態を窮極の理想とする點に於ては居ない。彼が後者と異なる點は、人間の間に物質上、知識上、及び道德上の相違の存する限り、國家權力が當然必要であると主張する所にある。又後者が革命的社會運動を聯合主義的原則に遵つて組織せんとするに反して、彼は嚴格なる中央集權的敎政主義組織を主張する。斯の如き組織に依つてのみ、革命的黨派の「確固たる目的が決定され、且つ全員の一致的行動が保證され得るであらう」。彼にとつては革命的行動の唯一の直接綱領は「現存國家權力を破壞し否定するための手段としての組織」である。

Tkačev の政治上、社會上の見解は、露西亞の經濟的、社會的發展に關する彼の所說を視ふ時に於て、一層明瞭となるであらう。而して露西亞の社會的發達に關する彼の見解に就ては、一八七四、五年の交に於ける Friedrich Engels との論爭が最も有名であつて、後代の論者の屢〻引用する所なるは、特に指摘する迄もなく甚だ顯著のことである。而も此の兩者の論爭も畢竟するに、露西亞は、その特有なる村落共産團體の制度を基礎として社會主義的新社會秩序を實現し得るのであるから、西歐諸國とは自ら違つた社會的進步の徑路を辿るものであるとなすナロドニキ的觀念と、飽く迄マルクシズムの立場に立つて、村落共産團體の必然的崩壞と露西亞の資本主義的發展の必然性とを說

く見解との間に於ける相違に基いて居るものである。併し乍ら、此の見解の相違に就ては、筆者が嘗て屢〻論述せる所であり、且つ本文の末尾に於て再び關說する所ある可きを以つて、茲では Tkačev 對 Engels の論爭の詳細に亘るを避けて、僅かに次の一點を指摘するに止めよう。凡そ Tkačev の考ふる所に依れば、當時の露西亞の社會狀態の下に於ては、未だ明確なる階級としてのプロレタリアなるものが存在して居ない。從つてブルジョアの階級も亦、全然存在して居らない。即ち、資本の力は未だ全然萌芽の狀態にあるに過ぎない。故に露西亞の國家權力は、國民の經濟生活に何等の根據を有せざるのみならず、孰れの經濟階級の利益をも代表して居るものではない。故に斯の如き國家權力を破壞するのは頗る容易であるといふのである。換言せば、當時の露西亞の社會狀態は甚だ革命的變革に好適であるが、若しも革命が遷延する場合には非常に不利益な結果を生ずるのであらうといふのが、Tkačev の見解であつた。何故かといふに、時の經過するに從つて露西亞の經濟關係及び社會關係が此の特色を消失し、次第に資本主義的の傾向を帶ひるに至るであらうからである。（註二）

（註二）　マルクシストとの此の見解の相違に拘らず、前段に說明したる彼の主張が、後年のボリシェヰズムのそれと一脈相通ずる所あるは頗る興味多し。

Tkačev の論爭的態度は多くの敵を作つたので、彼の學徒と稱す可きものは、國內に於ても國外に於ても、左程多數ではなかつた。彼の思想の名に下に鬪爭せる組織もなかつた、唯僅かに一八七五年以降、彼の革命主義原則を奉ずる小さな革命團が露西亞に存在して居たが、それすら左程重大なる勢力を持つて居たものとは思はれない。併し "Nabat" に於ける彼の激越せる革命的主張、就中、革命黨の任務は革命を準備する事ではなくて之を急速に實行する事である、革命の全勢力は政府及び現存秩序との鬪爭、倒れて後熄むの鬪爭、向けねばならないと叫べる其の急進的主張は、當代の革命運動に影響する所尠少ではなかつた。七拾年代の終りに向つて、Tkačev とは何等の關係なくして組織せられ、寧ろバクウニン主義に從つて行動せる革命的諸團體が、次第に彼の主張を承諾するに至つた事を看過する事は出來ない。一八七七年迄 Tkačev 自身の編輯の下にあつた "Nabat" は、其後一八八一年迄彼の學徒によつて繼續せられた。(Kulczycki. a. a. O. SS 177-195 參照)。

七

「民衆の中へ」の運動の失敗が決して露西亞に於ける革命的社會運動を挫折せしめたものではなかつたといふ事は、前述し來りたる所に依つて略〻了察し得るであらう。當に此の運動が挫折しなかつた許りではなく、平和的運動に絶望したる革命家等は、反つて一層熾烈なる革命的企圖を試みんとするが如き氣勢を示すに至つたのである。一八七六年の三月にはセント・ペテルスブルグに於て、曩にチャイッヴスキイ團其他の革命的團體に所屬して居た人々によつて、露西亞に於ける最初の政治的示威運動が行はれ、同年十二月にも亦再び首都に於て、盛大なる示威運動が行はれた。而して此等の示威運動を機會に、新なる革命的黨派が出現するに至つた。之れが即ち新しき「土地と自由」黨（"Zemlija i Volja"）である。（註）

（註）　「ヴ・ナロッド」と其後の革命的社會運動

（註）最初の「土地と自由」黨は、一八六二年から同六四年迄存續した。前掲拙稿「農奴解放後の露西亞社會運動」參照せられたし。

「土地と自由」黨の綱領は、著るしく Bakunin の無政府主義的色彩を帶びたるものであつたが、而も幾多の點に於て妥協的の性質を有するものであつたが、固より此黨派に屬する人々が妥協的であつたといふ譯ではないが、綱領の此の特質は、「民衆の中へ」の實際運動によつて彼等の理解したる農民の心理に適合せしめんがために他ならなかつたのである。此の綱領は、下からの革命即ち人民の革命のみが、現在の社會秩序を完全に破壞して新なる社會を創造し得る力であると信じ、此の理由から人民の最大多數を占むる農民の間に活動するのが革命黨の最も重要なる任務であると述べて居る。蓋し此の黨派は、其の名稱の指示する如く、依然として Pugačev, Razin 以來の古き革命的精神の傳統を繼承し、露西亞に於ける最高の且つ最も緊切なる問題は農民の完全なる解放である、即ち土地と自由とを彼等に賦與する事にあるとの信念に基くものであつた。土地は自ら耕すものゝ財產である、故に速かに地主より沒收す可しと主張せられる。又自由とは、人民の意志によつて統治せられる自由なる自治的共同體を意味するものである。而して先づ刻下の急務は、人民の革命を實現するといふ事にある、換言せば露西亞に於ける社會主義的組織を可能ならしめんがために、人民の多數を革命化する事にあると主張せられたる黨派の活動は、左の諸點に要約する事が出來る。（一）民衆の組織化、支配階級に對する最も有效なる鬪爭は、一定の計畫に基いて指導せられる、自覺せる民衆の結束と組織とによつてのみ行はれる。（二）煽動的活動、現在の民衆の不滿を利用して、彼等の間に確固たる鬪爭の要求を喚起すること。此の煽動は能動的及び受動的の二種に分たれる。能動的煽動とは、暴動と叛亂とを惹起せしむるを目的とするものであつて、受動的煽動とは、同盟罷業を行ひ、請願書を上呈し、又は納稅及び兵役を拒否する等の手段を講ずるを言ふ。（三）既に人民の間に存在する組織と、緊密にして秩序ある關係に結合する事。こは、社會上、政治上の見解に於て多少反對の立場にある黨派と結合することも亦必要であるとの意味を包含して居る。（四）宣傳的活動。社會の全階級間に革命思想を宣傳し、批判的に思考し自覺的に實行する人々を養成し其の數を增加せしむる事。之は或意味に於て、「民衆の中へ」の運動の繼續的活動である。

「土地と自由」黨は、此の趣旨に基いて組織せられた。組織は中央集權的であつて、一の嚴密なる黨則が規定され、中央委員會とも稱す可きものがセント・ペテルスブルグに置かれた。而して之れは次の諸團體を包括するものであつた。一、統轄部、組織全體の事務を掌るもの。二、知識階級主として靑年學生間に煽動を行ふ團體。三、工場勞働者間の煽動を目的とする團體。四、農民の間に煽動する團體、之は總ての團體中活動範圍が最も廣汎で各地方に及ぶ。五、政府を混亂に陷れ之れが瓦解を目的とする團體、此團體の重要なる職務は、捕縛され監禁されたる同僚の救濟、政府當局の壓制的行爲に對する防禦、自己防衞手段として背反者を嚴罰に處し、場合に依つては死罰を加へる事、等であつた。又此の團體は中央委員會に對して最も獨立的なるものであつて、詳細の計畫や實行は概ね此團體だけの嚴重なる秘密とせられ、單に計畫の概要のみが議られるといふ組織であ

つた。政府の高官に對して屢〻行はれたるテロリズムの手段は、此の團體に依つて爲されたものである。（Kulczycki. a. a. O. SS. 214-215. Masaryk op. cit. p. 94.）。

「土地と自由」黨によつて宣傳せられたる革命的叛亂の氣運は、人民の間に次第に釀成せられた。加之、當時露西亞は土耳古との戰爭に際會して居たのであるが、此の危急時に當つて、政府當局の紊亂と不正とは其の極に達し、國庫金の亂費と公然たる收賄行爲の流行とは人民の間に漸く怨嗟憤懣の聲を高め、斯くて不穩なる空氣は社會一般に瀰漫するに至つたのである。然るに他方人民の騷擾と革命的社會運動とに對する官憲の抑壓と所罰とは、殆に苛酷峻烈なるものがあつた。故なくして捕縛せられ、且つ斷罪に處せらるゝ事は、決して稀有ではなかつた　茲に於て革命家等は、テロリズムに對するにテロリズムを以て報ゆるに至り、此の傾向は、一八七八年以降、一層顯著なる現象となつた。同年一月二十三日、Věra Zasulič がペテルスブルグの警視總監 Trepov を射擊せる劇的事件を初め、同年八月四日には、Stepniak の名で知られて居る Sergii Kravčinskii によつて憲兵隊長 Mezenčev 將軍が暗殺せられ、翌年二月九日には、カルコフ縣の總督 Dmitri N. Kropotkin 公爵が Goldenberg により、同三月十二日には、Mezenčev 將軍の後繼者 Drenteln 將軍が Mirskii によつて暗殺せられた。而して四月二日には、Solov'ev による皇帝歷山二世の狙擊事件が生じた。政府は新しき組織的手段を以て、全國に亘つて革命主義者を逮捕しようと企てた。併し峻嚴なる政府の政策は、愈々彼等の數と其の流血の度を增加するに役立つもの〻如くであつた。

此の時に當つて、「土地と自由」黨の內部に於て、テロリズムの問題が喧しく論ぜられるに至つたのは固より當然の事と言はねばならない。而して此の問題を中心にして、黨派が自ら二つの傾向に分離しつゝある事が明白となつた。一は專ら從來の綱領を遵守せんとするナロドニキ的無政府主義派であり、他は政治的行動を力說するテロリズムの一派である。斯くて結局、這般の問題を決定するために大會を開催する事となり、大會の場所としてヲロネヅが撰定せられたのであるが、大會に先だつて、テロリスト派は一八七九年六月十七日リペックに集合し、次の如く彼等の態度を決した。

現在の露西亞の支配下に於ては、人民の爲めの如何なる活動も不可能であるから、先づ支配的政治形態を顚覆する事が必要であつて、此の事は唯武裝的行動によつてのみ可能である。即ち露西亞の國民は、一切の社會上、政治上の事件を言論文筆に依つて自由に討議するの可能を有せず、又自由代議制度に據つて之等を決定す可き可能をも有しないのであるから、從つて斯の如き場合には、勢ひテロリズムの行動が必要となるのである、と。彼等は此の目的に向つて、特殊なる「執行委員會」の組織を決議し、又皇帝暗殺の企圖が全員に依つて承認された。リペックの會合が二十日に閉されると間もなく、翌二十一日より二十四日に亘り綱領の修正を論議す可きヲロネヅの大會が行はれた。此の大會に於て、多數黨員はリペックの決議に贊同し、テロリズムの行動を推擧せるに反し、少數派は、過激なるテロリズムの手段は徒らに彼等の社會運動を混亂するものであるとして之を排したのである。

討論の結果として妥協的の決議が採用された　即ち綱領の根柢は變更せられる事なく、再び「土地と自由」黨の主要なる任務は人民の間に革命主義的活動を行ふ事にあると宣言せられ、革命そのも

のは人民自身の仕事である旨が依然として主張せられた。併しそれと共に、政治的闘爭の必要、政治上、經濟上に於けるテロリズムの必要が容認されたのである。黨内部のテロリストの團體は運動の自由を保證され、資金の一部が此の目的に供用さるゝ事が決議された。けれども此の妥協的の決議は結局支持され得なかつた。加之ならず相反する二つの潮流が何時迄も同一組織の中に存在することは不可能であつた。既にヲロネヅの大會に於ける意見の確執によつて「土地と自由」黨を脱退したる Plehanov は、黨派の中に二つた少數派と通じ　又 Véra Zasulič, Akselrod, Leo Deutsch, Stechanovič　の如き從來のナロドニキ無政府主義の傾向に屬する亡命者と相提携して、黨内部の新傾向に斷然反對した。斯くて同年秋遂に「土地と自由」黨は二派に分裂したのである。一は、政治的自由の獲得を第一目的とし、テロリズムを以て現在に於ける最も緊要なる闘爭形式なりと主張する所の「人民の意志」黨（"Narodnaja Volja"）であり、他は、Plehanov　一派の「黑土新分割」黨（"Černyi Peredĕl"）である。前者は社會革命黨、（エス・エル黨）の前身であつて、後者は社會民主黨の前身である。

「土地と自由」黨の分裂は畢竟、露西亞に於ける一般社會的情勢の進展が、此國の社會運動をして最早や從來の狀態に止まらしめなかつたといふ事を意味するものである。今や社會運動上に於ける新なる局面の打開が必要であつた。彼等は結局、壓制的なる專制權力に對して最後の暴力的反抗と之れが恐怖主義的破壞を試みるか、又は退いて社會的進歩の一般的推移をより深く理解し、依つて以て運動の方針を新に樹立するか、二途其の孰れかを撰ばねばならなかつたのである。

「人民の意志」黨の主張は同名の機關雜誌 "Narodnaja Volja" に依つて覗ふのが最も適當である。故に筆者は主として Mayor の採錄する所に遵ひ、之れが大要を左に叙説するであらう。

右の機關雜誌第一號（一八七九年十月一日）は先づ次の如き見解を表明して居る。曰く、露西亞の國家は本質上歐羅巴の諸國家と全然相違して居る。何故かといふに、露西亞の國家は、後者に於ける如く一支配階級の代表者委員會ではなくて、獨立的の一團體即ち人民の經濟的、政治的奴隷狀態を支持する所の一の敎職政治組織だからである。縱令此の國には未だ擅取者階級が存在して居らないとは言ふものゝ、國家は依然として露西亞全領土の一半を所有し、農民の過半は國有地の單なる小作人に過ぎないのである。又此の團體が其の特殊的地位を維持して居る所以は、專ら不斷の壓制迫害、處刑、追放等の暴力手段に訴ふるが故のみである。斯くて此の國の政府は自ら獨立的の存在物であつて、人民の生活とは全然相關する所がない。即ち政府は人民を基礎とせずして、人民の受動的軍律的服從と彼等の政治的無知との上に加へる暴力を基礎として居るに過ぎないのである。然るに顧つて露西亞の民衆は如何であるかといふに、彼等は無力且つ因循姑息であつて只管政府の壓迫を恐捷し、未知の多艱なる將來よりは寧ろ現在の害惡に甘んずるといふ狀態である。又斯の如き政府の壓迫に對抗して幾多の社會思想が發達し、多くの批判的精神を生んだのであるが、而もその批判的精神は概ね怯懦にして消極的である。從つて一般民衆の社會思想は制限せられ、時代の最大の必要が理解せられて居ないのである。斯の如きが正に露西亞の現狀である。茲に於てか最も必要

なるものは、時代の眞の要求を看取し、自らの指導の下に一切の社會問題を解決し得るが如き黨派の存在である。而して斯の如き黨派は、その原則をして實際生活と密接に結合せしむ可きである。換言せば、斯の如き黨派は、須らく具體的の、直接必要なる計畫に着手し、其の特定の時期に於て最も有効なる諸手段を撰擇しなければならないのである。而して曰く、「現在こそ洵に重要なる時期である。若しも社會黨が現狀を理解し之を支配し得るならば、迫害、求刑、禁錮の如きも、現狀より生ず可き結果に比して甚だ些々たるものであらう。我々は今や繼續的に、組織的に、著實に、政府組織に對抗し、壓制的なる政府機關を破壞し、而して社會生活に於ける社會主義的理想と形式との自由發展の可能を人民に保證す可き時の到來しつゝあるを確信するものである」と。

"Narodnaja Volja" 第二號は、政治的鬪爭の必要を次の如く主張して居る。「先づ、人民を政府の繰絲から釋放する事が心要である　此の理由によつて我々の活動は、當然政治的性質を帶びざるを得ない。……併し乍ら政府に對する鬪爭を要求する事によつて、我々が社會的經濟的革命に反對するものであると考へてはならない。唯我々の力說せんと欲する所は、現在の事情の下に於ては政治的革命と社會的革命とが密接に連結す可きものであつて、其の一つは他のものなくして不可能であるといふ事である。我々は政治的、社會的革命の新軌道を指摘しつゝあるに過ぎないのである」。此論說は進んで憲法議會の召集を主張し、憲法議會に於ては議員の九割が農民の代表者より成るものと豫想し、此の議會手段によつて「一切の經濟的及び國家的關係の完全なる革新」を實現し得可しと論じて居る。即ち「人民の意志」黨は、政治革命に依る人民の權利の獲得を緊急の目的とし、社會の改造は然る後に憲法議會の手段に依つて遂行され得ると信じた。而して現時に於ける政治革命の最も有効なる武器として、テロリズムの手段を推擧したのである。

「人民の意志」黨の主義と手段とは、一八七九年の「執行委員會綱領」（"Narodnaja Volja" 第三號—一八八〇年一月一日附—所載）に於て最も十分に表明せられて居る、此の綱領で執行委員會は自らを、「社會主義者にして且つナロドニキ」であると宣言して居る。而して曰く、「自由、平等及び同胞愛を人類生活の中に結合し、斯くて共同の福祉と個性の完全圓滿なる發達とを獲得し、依つて以て人類の進步を成就する事は、唯社會主義的原則に遵つてのみ可能である。又、唯人民の意志（Narodnaja Volja）のみが社會的形式を是認し得るといふ事、人民が獨立と自由とを得て、總ゆる思想が彼等の良心と意志とを通じて其の生活に結合さるゝ場合にのみ、人民の健全なる發達が行はれるといふ事を、我々は信ずる。人民の福祉と人民の意志—此の二つは最も神聖なる、最も密接に關聯する我々の原則である」と。

綱領の要點は次の如くである。（一）、人民は經濟上、政治上、全然奴隸狀態にある。即ち露西亞の人民の生活は、全然其の意志とは無關係に營まれて居る許りでなく、彼等は自らの意志を表現する權利すら許されて居ない。總ゆる方面から壓倒せられて、人民の無力と廢頽とが生ずる。而して其の生活は、總ゆる意味の貧困と隸屬とによつて破壞せられる。（二）、人民は漕刑罪人の如くに繫縛され、政府の擁護の下にある搾取者の爲めに抑壓されて居る。國家は此の國に於ける最大の資本家的勢力であり、唯一の政治的壓制者である。此の抑壓的權力が人民の是認を得る理由は皆無であ

る。而も此の權力は、人民の希望と理想とに全然沒交渉なる政治上及び經濟上の原則と組織とを支持し、且つ之を人民に強制して居るのである。(三)、此等の狀態にも拘らず、人民の間には、かの舊き傳統的觀念—土地に對する人民の權利、共同的地方自治制度　聯邦組織の建設、思想及び言論の自由、等の觀念が依然として存在して居る。若し人民がその希望に遵つて生活し得るならば、此等の觀念は速かに發達し、此の國の歷史に全然新しき方向を與へるに相違ない。(四)、故に刻下の急務は、現存制度の壓制的勢力を排除し、人民の掌中に權力を把握する目的を以て政治的革命を斷行する事にある。此の革命の結果として、人民の發達は其の意志に遵つて獨立的に行はれ、且又純粹の社會主義的原則（それは「人民の意志」黨と人民とに共通の原則である。）が承認され支持されるだらう。(五)、一般選擧に依つて自由に選出せられ、且つ選擧民の指示を遵奉する所の憲法議會に於て、人民の意志は最も良く表明せられるであらう。勿論憲法議會と雖も、人民の意志を表現するための理想的制度と相隔ること甚だ遠いのではあるが、現在實行し得可き、斯の如き制度の唯一の形態である。(六)、故に我々は、現存政府から權力を奪取して憲法議會に之を移す事を目的とする。而して憲法議會は、一切の國家制度及び社會制度を檢覈し、選擧民よりの指示に遵つて新社會秩序を建設するの任務を負ふものである。(七)、我々は、人民の意志に服從すると共に、我々の綱領を人民に提示するを以て、一黨派としての義務なりと考ふる。我々は其の綱領を革命の宣傳に利用し、運動の期間を通じて之を推擧し、憲法議會以前に於て之を擁護せんとするものである。(八)、綱領の特殊なる點として擧ぐ可きもの次の如し。(1)國事全般の上に全權を有する一の進步的人民代表制度、(2)村落共產團體の獨立と人民の經濟的獨立とによつて保障せられる廣汎なる地方自治制度、(3)土地は人民に歸屬す可き事、(4)作業場及び工場の全部を勞働者の管理に移す事、(5)思想、言論、印刷、集會、結社及び選擧の絕對的自由、(6)何等の階級的制限若くは財產上の制限なき一般選擧制度、(7)常備軍を廢し、國民兵を以て之に代ふる事。(九)、此の綱領を實現するための手段次の如し。(1)宣傳—社會改革の手段としての民主々義的政治革命の思想を全階級間に理解せしめ、且つ黨派の綱領を普遍化せしむるといふ一般的目的を有する宣傳、並に、現存制度に對する不斷の反抗と憲法議會の召集に對する要求といふ特殊的目的を有する宣傳。且つ右の反抗手段として擧ぐ可きものは、集會、示威運動、請願、演說、納稅の拒否、等である。(2)破壞的テロリズムの活動、政府の最有害分子を、殲滅し、又黨派を防禦するために、政府の間諜及び政府のために最も重大なる暴力行爲をなしたる者を所罰するが如きである。此等の活動の目的は、政府權力を破壞し、之に對する鬪爭の可能に就いて不斷の證明を與へ、依つて以て人民の革命的精神を高揚せしむるにある。(3)秘密結社を組織し、之等のものを一の中心的結社に結合すること、(4)行政上、社會上の有力なる關係と地位とを人民の掌中に獲得する事、(5)「人民の意志」黨にとつて肝要なる事は、人民が黨派なしに行ふ時期を待たずして、自ら革命の戰端を開始するといふ事である。(Mavor: op. cit. pp. 114-120)。

「人民の意志」黨の主張に於ける理論上の基礎を形成するものは、大體に於て、Lavrov 及び Mihailovskii の學說であつたと看做すことが出來よう。而して此の兩者は、啻に理論上の關係に於てのみならず、「人民の意志」黨の實際的活動にも可成り密接なる關係を有して居たのである。

Mihailovskii は "Narodnaja Volja" 第二號及び第三號に、Grojar の匿名で「一社會主義者の政治的書簡」を寄せ、此の黨派の政治的活動に贊意を表して居る。嘗て指摘したる如く、夙に彼は革命黨による國家權力簒奪の主張を容認して居たのである。Lavrov も亦、其の初め此の黨派の行動に反對の態度を示して居たのであるが、後年之れと事を共にして居る（併し此の事情も、亦嘗て七拾年代の露西亞社會思想の概要を述べたる時に關說せる所なるを以て玆では之を省略しようと思ふ）。

「人民の意志」黨の執行委員會は、テロリズムの手段を遺憾なく實行した。當時著名なる當路の大官が引續いて危害を加へられた。就中、皇帝暗殺の計畫が屢々企てられた。一八七九年十一月にはクリミアから歸還中の御召列車を爆破する計畫が行はれ、翌年二月にはセント・ペテルスブルグの冬宮が爆碎せられた。玆に於て政府當局は事態の急を看取し、Loris Melikov に絶對的獨裁權を與へ、革命運動の根絶を期したのである。（註）Melikov は此の目的に向つて斷乎たる處置を實行した。併し他方に於て彼は、從來極端なる壓制政策の下に抑止せられて居た人民の權利を尊重し、憲法に對する人民の熱心なる希望を何等かの形で滿足せしめようと考へたのである。然るに度々の暗殺計畫に脅されて著るしく反動的になつて居た歷山二世が、Melikov の此の計畫の採用を狐疑逡巡しつゝあつた間に、他方革命黨は新計畫を樹立し、唯機會の到來を待つ許りであつた。斯くして薄幸なる皇帝は、一八八一年三月一日閱兵式よりの歸途、數名の革命黨員によつて計畫的に行はれた投擲彈によつて暗殺せられたのである。（註）

（註）Melikov の獨裁的支配は屢々 "diktatura serdisa"（dictatorship of the heart）と呼ばれて居る。又歷山二世暗殺の經緯は Kropotkin: Memoirs, p. 435 以下に描出せらるゝ所を參照せられたし。

歷山二世暗殺後、政府の過激なる反動的保守的政策は全國を支配した。Melikov は退けられて、一八八二年には、著名なる保守主義者 Dmitri Tolstoi が全權を承握し、「反動主義の虛無主義者」と稱ばれる Pobědonoscev の專制主義的復古思想が、八拾年代に於ける政府支配の指導的精神となつた。革命黨員に對する逮捕と投獄と斷罪とが徹底的に行はれた。斯くて「人民の意志」黨の活動は皇帝暗殺後殆ど終熄した。勿論此の黨派は其後尙存續して、或は宣言書を發し或は新なる結束を企圖しつゝあつたのであるが、二十世紀初頭の革命期に及んで社會革命黨として新に再現する迄、何等重要なる活動をなす所がなかつたのである。

九

一八七九年「土地と自由」黨から分裂したる他の一派「黑土新分割」黨（"Černyi Peredël"）は、土地國有の主張と共に都市無產階級の利害と農民の利害とを結合せんと試み、此の黨派の組織者の一人にして理論的方面の指導者たる Plehanov は、Marx の思想を之れに適應せしめようと試みたのである。併し猶多くの點に於て依然として古き無政府主義的傾向が保留せられて居た。

「黑土新分割」黨は、農民問題の解決を以て社會問題其のものゝ本質であると考ふる事に依つて、自らナロドニキ運動の革命的一派であると宣言した。彼等は同名の機關紙 "Černyi Peredël" に於て、土地の一般的分割が間もなく行はれるだらうといふ確信が農民の間に廣く普及して居るといふ事を力說し、此の事實から次の如き考察を加へて居る。農民は斯の

如き分割に努力し結局之れを實行するに相違ない。革命黨は人民の此の傾向を支持し乍ら同時に彼等の狀態を明に理解し、而して人民を組織的に結合するに努力しなければならない。と。彼等は、經濟狀態が總ゆる他の社會的政治的組織の基礎である事を承認し、急進的改革者は先づ經濟狀態の根本的變革に從事す可きであると主張した。而して彼等の目的は、集產主義的に社會組織を改造する事であつて、露西亞に於ては斯の如き組織は、ミール（Mir）及びアルテル（Artel）から發達する事が可能であるといふにあつた。從つて「黑土新分割」黨は、專ら政治的鬪爭を力說する「人民の意志」黨を論難した。その所論によれば、當て政治的革命は何れの國に於ても人民の經濟的自由を確立しなかつた許りではなく、政治的自由すらも眞に保證する事がなかつた。憲法は貴族と勞働者とに對抗する有產階級の專有物となつた。露西亞でも亦同樣の結果とならう。疑ひもなく人民の總ては政治的自由を望んで居る。併し農民にとつては、彼等の自由は其の經濟狀態と密接に結び付いて居るのであるから、先づ第一に這箇の狀態が考量せられねばならないのである、と。

要之「黑土新分割」黨の奉する所は、全然古き傳統的の革命主義に過ぎなかつた。彼等はBakuninの例に倣つて共同體の自由聯合組織を其の理想として居る。又縱令大體に於てMarxの唯物史觀を承認して居たとしても、猶露西亞に於ける社會進步が獨特の徑路を辿る可き事を信じて居たのである。其の機關紙の或部分に於て次の如き見解が表明せられて居る。强大なる個人主義が經濟生活を支配して居る所では、概ね資本主義が社會主義に先行す可きものであるが、露西亞に於ては、農業關係に於ける個人主義が未だ發達して居らないのであるから、此の國は資本主義の階段を通過する事なくして、直接集產主義（Collectivism）に推移する事が可能であると。（Kulczycki, a. a. O. SS. 340-342. Masaryk. op. cit. pp. 97-98）。

併し其の指導者Plehanovが、次第に彼の無政府主義思想を放擲して純然たるマルクシストとなるに及で、此の黨派の面目も亦全く一新せざるを得なかつた。Plehanovは專ら露西亞社會民主黨の組織と他國就中獨逸マルクス派との提携に奔走した。斯くて一八八三年に至つて、「黑土新分割」黨は全然其の組織を變革し、後の社會民主黨の母體たる「勞働者解放團」（"Gruppa Osvobozdenija Truda"）となつて出現するに至つたのである。同年Plehanovは「社會主義と政治的鬪爭」の一書を公にして他の黨派に對して自黨の立場を鮮明にし、マルクス主義の見地からHerzen, Černyševskii等の社會主義、Bakuninの無政府主義、並にTkačovのブランキズムを批判し論駁した。後、Lavrov, Mihailovskiiの主觀主義の社會學說に對して論戰を進め、專心マルクス主義學說の普及に盡瘁した。八拾年以降、露西亞社會運動の中心勢力は、次第にPlehanovを中心とするマルクス派の掌握する所となつたのである。

十

農奴解放後の總ゆる革命的社會運動を指導し來れるナロドニキの勢力が漸く衰退し、八拾年代以降マルクス派が之に代はるに至つたといふ此の進展推移は、一に露西亞に於ける經濟的發展の結果たるは論を俟たぬ所である。蓋し社會運動上に於けるマルクス主義理論の承認は、少くとも社會の資本主義的發展と之れに附隨する無產勞働者階級の發生及び增大といふ經濟的條件の存在を豫想す

るものなるが故である。然らば果して露西亞は此等の條件を具備するに至つたのであらう乎。

露西亞經濟史を繙くものは、露西亞に於ける製造工業の發達は、一面から見れば農奴解放の有力なる一原因ではあつたが、此の國に於て近世的の資本家的大工業が漸く實現するに至つたのは、寧ろ農奴解放の結果からであつたといふ事に氣付くであらう。一八六一年の農奴解放は、其の解放の不當なる條件のために甚だ不徹底なる改革に終り、從つて一般人民の不滿を釀成せしめたものであつたが、之れを一般經濟上より觀察すれば、露西亞は此の根本的變革に依つて奴隷經濟の束縛から離脫し、而も一轉して資本主義的經濟への大飛躍を經驗するに至つたものであると考へられ得るのである。ナロドニキ側からの種々なる反證にも拘らず、露西亞に於ける國民經濟の資本主義化と之に伴ふ社會組織の變動とは、明白なる事實として現出し來りつゝあつたのである。總ゆる方面に亘つて資本主義的生産の企業が次第に發達し、此の現象は大規模生産事業に對する政府の直接間接の補助政策並に滔々たる外資の流入に促されて、一層助長せられるに至つた。斯の如きが前世紀後代に於ける露西亞經濟社會の一般的情勢であつた。

然るに他方に於て、農奴解放の結果は、筆者の屢〻指摘せる如く、決して貧窮なる農民をして事實上彼等の奴隷的境遇から解放せしむる事がなかつた。農奴解放の條件は　農民の負擔を著るしく加重すると共に村落共産制崩壞の危機を誘致すると共に、他方に於て、人口の增加に伴つて農民の所有する零細なる土地を益々粉碎分裂するに至り、其の結果として勢ひ農業上の無産階級が發生するといふ事になつた。又貧窮なる農民は、斯の如く分割されたる零細の土地を耕作することによつて到底彼等の生活を支持する事が不可能であつたが爲め、恰かも隆盛に向ひつゝあつた都市の大工業的企業に吸引せられ、都市無産階級の數と共の勢力とは極めて急速に極めて大なる膨脹發展を來したのである。

社會運動の指導者等は此の著るしい現象を看過する事はなかつた。就中「民衆の中へ」の運動の失敗に依つて農民の無力と怯懦とに絶望したる彼等が、その運動の主力を、漸次一大勢力となりつゝあつた都市無産階級に向くるに至つたのは至極當然の事と言はねばならない。即ち彼等は、「民衆の中へ」の運動の結果によつて農村と都市、農民と工場勞働者、此の兩者の本質を對照し、其の各々に對する革命運動の意義を次第に理解しつゝあつたのである。從つて七拾年代後期の綱領では、革命主義思想の普及並びに革命的勢力扶植の基礎となる可き眞の團體は都市無産階級である事が次第に認められ、最も有力なる革命主義的宣傳は主として、都市就中首都に於て行はれる情勢となりつゝあつた。此の事は、又他方より見れば專制政治を徹廢し政府の最高機關を一掃せんとする此の國獨特の革命的目的に對し、最もよく適應する手段であると考へられたのである。さて斯かる事情の下に、都市無産階級が明確なる一階級として容認せらるゝに及んで、之と共に階級鬪爭及び經濟的決定論に關する Marx の思想が一般の承認を得るに至つたのも亦、當然の事と言はねばならない

夙に一八七八年の交、Viktor Obnorskii, Stchastnyi, Sojus Russkich Rabotschich, Calturin 等の勞働者自身によつて指導さるゝ、「北部露西亞勞働者聯合」"Sievernij" が、社會民主々義的綱領を揭げて都市無産階級の運動に從事した事は、茲に注意して置く必要がある。その綱領は、一八七五年の獨逸

社會民主黨のゴータ綱領に基いたものであると言はれて居る。而して古き革命主義的行動より脫郤し、社會民主々義に遵據して其の運動を進めんとする此の團體の主張と活動とは、「土地と自由」黨によつて激しく非難攻擊せられたのであつたが、彼等も亦其の機關紙 "Rabotschaja Sarja" (Arbeiter-Morgenröte) を發刊して專ら勞働者の啓蒙に努め、其の存續期間の短かかつたにも拘らず、甚だ大なる影響を將來に及ぼしたのである。八拾年代以後屢〻行はれた大罷業の指導者等は、概ね此の團體の下に教育せられたるものであつた。

露西亞社會運動のマルクシズムへの推移は、固より上述の理由に基くものであるが、同時に、西歐諸國に於けるマルクシズム運動の隆盛に著るしく影響せられたものであつた。前世紀八拾年代及び九拾年代は、西歐諸國に於て、國際無政府主義運動が漸〻衰頽し、純正マルクシズムの運動の最も活躍したる時代である。英國に於ては、チヤーチスト運動の鎭靜と共に全く消滅したかの如く見えて居た社會主義思想が復活し、勞働者は、勞働組合のみを以てしては到底其の地位を改善し得ないと知つて、政治的活動を始めた。而して一八八一年には Hyndman によつて指導さるゝ純然たるマルクス主義黨 Social Democratic Federation が設立せられた。佛蘭西に於ても亦之れと同樣に、マルクシズムは Jule Guesde 等によつて廣く宣傳せられ、Guesde を盟主とするマルクス黨 Parti Ouvrier が組織せられた。更に獨逸に於ては、Lassalle 派の全獨逸勞働者同盟と Bebel の率ゐる社會民主勞働黨とが合同して獨逸社會民主黨を組織し、一八七五年のゴータ綱領の出現となつた。此の黨派は Bismark の社會黨鎭壓法の壓迫にも拘らず次第に勢力を增大し、而も漸次 Lassalle の影響を脫して純然たるマルクシズムの方向に進展しつゝあつたのである。露西亞のマルクス主義運動も亦、西歐諸國に於ける此等の運動に促され、且つ之れと步調を共にして勃興したものに他ならなかつた、殊に獨逸に於ける社會民主々義運動とは常に密接なる關係を有して居たのである。

Plehanov を初め P. Akselrod, Věra Zasulič, Leo Deutsch 等は、一八八三年、亡命地ジエネバに於て「勞働者解放團」を組織した。その綱領は、猶幾多の點に於てナロドニキの觀念を全く脫郤したものではなかつたけれども、明にマルクシズムの理論に基いた社會民主々義的綱領であつた。爾來露西亞の社會運動は次第にマルクシズムの方向に導かれて行つた。一八九八年に其の誕生を見た「露西亞社會民主々義勞働黨」は、實に此の「勞働者解放團」を中心とし、露西亞全土に亘つて簇出したる同種の社會主義團體を單一の組織に結合したるものであつた。

十一

兎もあれ、マルクス派が露西亞社會運動史上閑却す可らざる地步を占むるに至つたのは、高々前世紀八拾年代以後の事である。勿論 Marx の學說と思想とは、既に早くから知識階級の間に普及し又事實上露西亞の著名なる社會主義革命家にして Marx と個人的親交のあつた者も少なくはなかつたけれども、最も猖獗を極めたる六七拾年代の革命的社會運動に於て、マルクシズムの影響は僅かに其の片鱗を示して居るに過ぎないのであつて、之れが基調をなすものは實にナロドニキ社會主義の思想に他ならなかつたのである。

"C'est la campagne qui fait le pays, et c'est le peuple de la campagne qui fait la nation." 其の運

動が、露西亞は根本的に農業國である、故に露西亞及び露西亞の運命に關する總ての思想が農民（muzik）に向けられねばならないといふ事實の表現である限りに於て、Rousseau の "Emile" 中の此の一句はナロドニキ思想の信條であつた、と Masaryk は記述して居る。（op. cit. p. 304）露西亞の社會上、經濟上の基礎は農業にある、農民は人口の絶對的多數を占めて居る、故に社會上、政治上、經濟上、一切の問題は畢竟此の一點に集中するものであつて、文學、歷史、社會科學の如きものも亦、結局農民生活を中心として取扱はれねばならないといふ思想が承認された。從つて社會改造の問題も亦農民を解放し彼等に其の自ら耕す所の土地を與へよとの要求に其の根源を發するものであつた。されば西歐の社會主義思想が此の國に流入した時、著るしく其の趣きを變へ、此處に一種獨特の社會主義的傾向の發達が生じたのである。

ナロドニキ社會主義者は、露西亞の社會的經濟的進歩が特殊の進路を辿る可きものであると信じた。即ち資本主義的階梯は、露西亞では、Marx の說く如く社會進化の必然的發達階段ではなく、此の國の事情は、斯の如き過渡的階段を踰越して一躍社會主義の時代に到達し得可き前提條件を具備して居ると考へたのである。然らば其の條件とは何であるかといふに、露西亞村落共產團體（Mir）の制度が之れである。彼等の所信に遵へば、露西亞の村落共產團體制度は、固より原始共產生活の遺物には相違ないが、又一面には露西亞社會の特殊的環境の產物として存續して居るのであつて、此の制度に改善を加へ、益々之れを發達せしむる事に依つて、將來の共產主義的地方自治體の單位を形成するに至る可きものであると言ふにあつた。彼等は、村落共產團體內部の連帶的關係を相互扶助的精神との中に共產主義的自由の原則を認め、之を以て彼等の社會主義的希望と結合しようと企てたのである。ナロドニキ社會主義の斯の如き思想は、決して一定の形式に統一された明確なる教義ではなかつた。又一人の權威ある理論的指導者をも有し　居らない。筆者が前段叙說し來りたる如く、種々なる傾向の理論家及び黨派が各々其の樣式に從つて主張し唱道したる所であるが、而も當年の社會主義思想の根幹をなす所のもの、從つて又當時の革命的社會運動の基調となつて居た所のものは、全く斯の如き一聯の思想に他ならなかつたのである。

勿論後期のナロドニキは、露西亞の資本主義的發展の傾向を無視する事はなかつた。併しマルクス派が露西亞村落共產團體を目して、原始的共產制度の單なる殘滓であつて、近世に於ては專制的政府及び資本家階級が最良の搾取手段として之を利用し强制する所であり、且つ此の制度はより高き資本主義的發達の行程に於て當然崩壞し消滅す可き運命を負ふものなりとせる見解、又村落共產團體の制度は農民の物質的利益を損傷すると共に、其の一切の利益を農民の傳統に依つて制限して以て其の精神的發達をも阻害するとなせる非難に對しては、全然反對の態度を示した。換言せば、後期のナロドニキは大體に於て Marx の學說を承認したけれども、歷史的進化の說明に關しては永い間之れが修正を主張して居たのである。

ナロドニキ社會主義の以上の特質と相並んで、當時の社會運動の上に著るしく現はれて居る他の特徵を見逃すことが出來ない。即ち露西亞の社會運動は首尾一貫、壓制的專制主義に對する反抗的鬪爭であつた事は明白であるが、就中當時の運動に於ては、極度の抑壓と迫害とに對する反動的傾

向が甚だ顯著であつたといふ事である。一切の權威を否定する無政府主義思想が此の國に於て決定的の影響を與へたといふのも、個人の自由、個性の解放の要求が革命思想の根本原理を形成するに至つたのも、皆等しく社會上の總ゆる方面の壓迫に對する一の反動であつたと看做す事が出來よう。斯くて「村落共産團體制度の信仰がナロドニキの學說の經濟上の中心點であつた如く、個性の信仰は其の哲學上の出發點となつて居るのである」（Rabinowitz; Zur Entwicklung. S. 41）。Mihailovskii が「個性の爲めの戰」を宣し、又 Lavrov が批判的に思考する個性を社會的進步の原動力として推稱し、而して此の兩者の學說が當時の革命運動の理論的基礎となつて居る事は既に說述したる所である。

又當時、殊に七拾年代の終末に向つて未曾有の猖獗を逞しうしたテロリズムの傾向の如きも、極端なる專制主義的迫害に對する必然的爆發であつたと見ねばならない。テロリズムは、革命的社會運動の必然の要素でもなく、又決して有效手段ではないであらう。併し當年の露西亞に於て避く可らざる必然の勢であつた事は、之れを容認せざるを得ないのである。當時の革命黨は、其の恐怖主義的急進主義にも拘らず、政治上、社會上の實際問題に關しては、其の要求する所が左程著るしく過激ではなかつたといふ事が屢々主張せられる。例へば一八八一年三月十日（歷山二世暗殺事件の直後）、「人民の意志」黨が歷山三世に宛てた著名なる書簡で、彼等は單に自由代議政體の爲めに戰つて居るに過ぎないといふ事、若しも皇帝が人民の選擧に依る國民議會を召集するならば、彼等は斯の如き議會の決議に對しては無條件に服從し、議會の是認する如何なる政府に對しても決して暴力的反抗を爲さないであらうと宣言したと傳へられて居る。而して斯の如き事例は一にして止まらないのである。然るに政府の頑迷なる保守的專制主義と峻烈苛酷なる迫害とは、彼等をして最早や其處には何等の合法的手段の餘地なきを痛感せしめたのである。斯くてテロリズムは、自己防衛の手段としても亦必然なりと觀せられたのである。

ナロドニキ的社會主義思想は、七拾年代のナロドニキ革命黨の衰亡と共に滅びたるものではない。露西亞に於ける社會運動の指導者は、假令彼等が純正マルクス主義を奉ずるものであるとしても、常に「土地と自由」の傳統的觀念を無視し得ないからである。爾來一九一七年の大革命の成就するに迄、露西亞の社會運動は、實に波瀾極まりなき難路を辿つて居るのであるが、そして又革命後のボリシエヰキ政府は、其の建設的事業に當つて洵に難澁なる行路を經驗しつゝあるのであるが、常に我々は、其處に、マルクシズムに對するナロドニキ思想の混淆と輕輕と鬪爭とを瞥見せざるを得ないものである。（完）

本篇は、曩に本誌に揭載したる二篇の論文「農奴解放後の露西亞社會運動」（第十八卷、第七號―第九號）及び「七拾年代の露西亞社會思想概觀」（第十九卷第二號）と併せて、之れが全篇を成すものであつて、全篇に亘つて記述せる所は、一八六一年の農奴解放の後略々二十箇年に亘る露西亞ナロドニキ社會運動の概要である。筆者は隨所に引用書を擧げ、記述の典據を明にしたつもりであるが、念の爲め參考に供したる主なる著書と論文とを左に揭ぐる事にする。

(1) Ludwig Kulczycki, Geschichte der russischen Revolution. Bd. I. 1910. Bd. II. 1911. Bd. III. 1914.
(2) Thomas Garrigue Masaryk, The Spirit of Russia. 2 vols. 1914.
(3) James Mavor, An Economic History of Russia. translated by Eden and Ceder Paul. 2 vols. 1919.
(4) A. J. Sack, The Birth of the Russian Democracy. 1918.

(5) Dr. Sonja Rabinowitz, Zur Entwicklung der Arbeiterbewegung in Russland bis zur grossen Revolution von 1905. 1914.
(6) Alphons Thun, Geschichte der Revolutionären Bewegungen in Russland. 1883.
(7) Julius F. Hecker, Russian Sociology, A contribution to The History of Sociological Thought and Theory. 1915.
(8) Alfred von Hedenström, Geschichte Russlands von 1878 bis 1918. 1922.
(9) R. Beazley, N. Forbes and G. A. Birkett. Russia from the Varangians to the Bolscheviks. 1918.
(10) P. Kropotkin, Memoirs of a Revolutionest. 1899.
(11) P. Kropotkin, Russian Literature Ideals and Realities. 1916.
(12) R. W. Postgate, The Workers' International. 1921.
(13) Fritz Brupbacher, Marx und Bakunin. 1922.
(14) Georg Steklow, Michael Bakunin, ein Lebensbild. 1920.
(15) Michael Bakunin, God and the State, with a Preface by Carlo Cafiero and Elisée Reclus.
(16) Max Nettlau, Bakunin und die russischer revolutionäre Bewegung in der Jahren 1868-1873. in Carl Grünberg, Archiv. für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung. Fünfter Jahrgang. 1915.
(17) W. Simchowitsch, Die sozial-ökonomischen Lehren der russischen Narodniki. in Conrads Jahrbücher. III. Folg, Bd. XIV.
(18) 佐野學著「露西亞經濟史研究」
猶、Karl Nötzel の二著 (a) Die Grundlagen des geistigen Russlands. 1923. (b) Die soziale Bewegung in Russland. 1923. を手許に有し乍ら遂に參照するの暇なかりしを遺憾とする。

價格及び價値の幾何學的研究

武部與八郎

一

圓とは一定點（圓の中心）よりの距離が一定（半徑）なる點の軌跡である。圓の中心を經濟的認識の主觀點とすれば圓周は經濟的認識の限界である。世界は意識の世界である。意識は意識する者を前提とする。意識の增大と共に世界は增大する。認識界は意識の及ぶ範圍に限る。

經濟學の認識の對象は價格一般である。經濟學の認識の對象は曾て（一）貴金屬であつた（二）勞働が費されたものであつた（三）效用を有するものであつた。富とは今價格を有する凡てのものの事である。

貴金屬が富でない事、貴金屬のみが富でない事は既に證明せられて居る。

アダム、スミス。ダビッド、リカアドォ及び其の後繼者等の生產費說は次の如く解せられる。價格を有するものは經濟學上凡て價値を有す。經濟的價値を有するものは凡て、而して經濟的價値を有する限りに於て其は經濟學の認識の對象である（アグム、スミス。諸國民の富。グビッド、リカアドォ。經濟學及び租稅原理。小泉信三。價値論と社會主義、第一編、價値論上に於ける生產費說と勞働說。參照）。我々は此の意味に於ける生產費說を批判し擴張する。經濟學上に於ける價格は〇